

「今、私の晴雨計は！」②

「七十歳になってわかったこと②」

平山征夫

前はタイトルにまつわる話をし

ているうちに本題に入らず終わってしまったが、ついでもう少し脱線しよう。やはり私の女性鬼婆化説には反応が多かった。賛否頂いたが意外と女性陣からの反論はあまりなかった。「自覚しています」という感想もあつたが、同時に「男性はどうなの」という質問があつた。私の答えは「大半は好々爺化するが、一部に頑固親爺化する」である。男が好々爺化するのも男性ホルモンが低下し、闘争心が薄らぎ、もめごとなど面倒くさくなる(自覚中)からと思う。

でも悪いことではない。鬼婆化する

妻に対し夫が好々爺化するから老夫婦うまくゆく。夫が頑固親爺化する場合、闘争心がぶつかるので夫婦喧嘩が絶えなくなる。それよりはずつと良い。

私は古稀を契機に好々爺になろうと決意した。その私が目指すは良寛さんだ。良寛さんぐらい無欲恬淡になることは今の物欲時代には難しい。そうありたいと願い書体まで良寛に似た漱石ですら亡くなる直前に「大愚成り難し」と言っている。同じ七十歳で良寛には四十歳も若い貞心尼が現れ七十四歳で亡くなるまで今で言う在宅介護状態だったのだから幸せな晩年と言えよう。貞心尼までは望まないとしても、穏やかな晩年を送るべく良寛さんを目標に好々爺を

目指している。

もう一つ脱線したい。前回長寿の男性の本は日野原さんくらいだと書いた。あとで出版こそしていないが親しくさせて頂き数年前一〇三歳で亡くなられたYさんのことを思い出した。日野原さんより三、四歳年上で、新潟市での日野原さんの講演の際

一番前で聴いておられ、質問コーナーで「私はあなたより年長で、今も元気で杖なしで飛び歩いている」と言ったら、恐縮した日野原さんがYさんをステージに上げて、「健康の秘訣は？」と聞かれたという逸話を残している人だ。そのYさんが携帯電話で連絡をとっていたのが同じケアハウスの少し年下の「彼女」だ。この彼女も元気でパーティーで来賓のオランダ公使と英語で会話しているの

でびっくりした。聴けば昔英語の先

生だったという。Yさんは毎晩十時に間酒一合を持って彼女の部屋を訪れ、二人でベッドの上に腰掛け、遅い晩酌をしながらお話するのを何よりの楽しみとしていた。そのYさんがある日私に真顔で「平山さん、私を“彼女のいる世界一の長老”でギネスに載せてもらえませんか」という。一瞬「面白い！」と思ったが世界一をどうやって確認するか、まだ上がいるな、などと思い「難しいでしょうね」と答えてしまった。今ではチャレンジしてみれば面白かったかもと悔やみながら、秘かに、では自分はその記録を狙おうかと思っている。